

メッセージ

元いわて復興応援隊

いわて復興応援隊メッセージ

私がいわて復興応援隊に着任した 2012 年 10 月から早いもので 10 年以上の月日が経ちました。着任するまでは神奈川県内の企業に勤務していました。学生時代を岩手で過ごした縁があり、震災後は岩手県沿岸部や神奈川県内で被災地関連のボランティア活動を行うなど、少しでも被災された地域のためになればと思っていました。

応援隊に採用されてからは勤務していた企業での経験も活かし、陸前高田市内の一般社団法人 SAVE TAKATA(現:一般社団法人トナリノ)で ICT 分野を中心に活動してきました。就労支援のパソコン教室、気仙地区の高校での Web 制作キャリア教育などの事業を担当していました。

応援隊として活動した 4 年間、大船渡市で生活し、活動先があった陸前高田も含め、住民の皆さんと関わったり、美しい風景が身近なところにありました。現在は岩手を離れ、地元の群馬県で生活していますが、今でも帰りたくなるような場所です。

齊藤健祐(群馬県在住)

活動期間:2012 年 10 月 1 日~2016 年 9 月 30 日

配置先:一般社団法人 SAVE TAKATA

私がいわて復興応援隊に募集した理由は 2 つ。畑でつなぎ姿の青年 2 人が鍬を高く掲げた「いわて復興応援隊」のフライヤーが衝撃的だったから。地域の方々が生活再建から経済活動に移行できるまでの間に自分に出来る事があればと思ったから。そして陸前高田市を選んだ理由は拠点としていた気仙沼から一番近かったから。

「復興の為」というよりは、地域の方々が自分たちで地域を動かせるまでの「つなぎ役」というのが正直な所です。

活動を通して私の財産の 1 つとなったのが年齢も経歴も出身地もバラバラな応援隊との出会いです。私たち初期メンバーが採用されたのが発災からまだ 1 年 7 か月しか経っておらず、いざ採用されると「こんなじゃなかった」という事が勃発しても簡単に怯む事なく鼓舞奮闘している姿が刺激・励みとなり、また年に数回の研修では別のメンバーの困り事に耳を傾け夜遅くまで語り合うなど「応援隊」という括りだけで集まったとは思えない結束を感じました。そこには「各地の復興の為に」という共通の想いがあったように思います。



高い志を持っていた訳でもなく、通勤距離優先で始まった私の活動は今では陸前高田市の特産の 1 つである「米崎りんご」農家へと変わりました。そしてそこには応援隊の同期も手伝いに来てくれます。東日本大震災が繋いだ縁が今の私を築いてくれています。

菅原 久美子(宮城県在住)

活動期間:2012 年 10 月 1 日~2017 年 9 月 30 日

配置先:一般社団法人 SAVE TAKATA

いわて復興応援隊メッセージ

東日本大震災を東京で経験した私は、故郷岩手のために何かしたいと考えるようになり、いわて復興応援隊に応募し、2012年10月から野田村に移住して活動しました。主な役割は交流事業の促進でした。同部署の仲間と共に村内を回って、村の人たちとの関係構築に努めながら、地域の魅力の掘り起こしや体験の素材などを探し、民泊ツアーの受け入れやイベントの実施等を行いました。

一番印象的だったのは、私たちが関わるようになった村の人達が、とても楽しそうにしてくださることでした。漁業でも農業でも、自分の仕事を知らせてもらえる体験受け入れはやりがいであり、活力だったようです。イキイキと仕事のことを教えてくださる村の人たちから、私のほうが活力を得られるほどでした。

諸事情から2014年3月までのわずか約1年半の活動期間でしたが、信頼して気にかけてくださった村の方々には本当に感謝しています。ありがとうございました。また、会いに行きます。

山下 美陽(盛岡市在住)

活動期間:2012年10月1日~2014年3月31日

配置先:野田村



私は2013年1月から2017年12月までの5年間、復興応援隊として岩手県宮古市に本社を持つ三陸鉄道に赴任し活動しました。

2013年当時はまだ震災被害により一部分しか運行できていませんでしたが、その中でも人気の「こたつ列車」や「震災学習列車」など企画列車を運行し乗車促進を図っていました。またTV番組の爆発的なヒットにより東北地域のみならず首都圏からも沢山の方が三陸鉄道を訪れ交流人口が増加しました。しかし震災以降、地域人口の減少により地元の利用が伸びず、また2021年に三陸沿岸道路が全面開通し車社会に拍車がかかるなど鉄道事業者としての課題が山積しています。

応援隊任期終了後も宮古市に住んだ者として沿岸地域を考えると、観光に対するポテンシャルが高い沿岸地域ですが、残念ながら核となる観光ポイントが離れすぎているため鉄道利用に繋がりません。交通インフラを有効利用するためにもバス会社等他のインフラと一体となって有機的に繋がるような仕組みが必要なのではと思います。また三陸鉄道の利用促進策として、軽貨物の輸送なども考えられるのではと考えています。

小石川 茂(神奈川県在住)

活動期間:2013年1月1日~2017年12月31日

配置先:三陸鉄道株式会社

いわて復興応援隊メッセージ

震災当時、地元愛媛の銀行に勤務していました。その時は、行動を起こすこともできず想いを寄せることしかできませんでした。震災から1年が経った頃、自分の将来について深く考えるようになり、幼い頃からの夢である「教員」を目指そうと決めました。しかし、教員になる前にやり残したことはないかと考えた時に浮かんだのが「東北」のことでした。震災当時何もできなかったことへの後悔からボランティア活動に参加しているときに応援隊の募集を知り応募することにしました。

配属された先は、山田町の社会福祉協議会にあるボランティアセンターでした。活動の内容は主にボランティア活動のマッチング業務でした。震災から2年が経過し、ボランティア活動はハード面よりもソフト面での活動が多く、またその重要性を強く感じました。活動中に思い出に残っていることは、多くの方との出会いです。ボランティア活動する人、住民の方、それぞれの想いにたくさん触れさせていただき、温かい気持ちになるとともに、私にとっての山田町が「被災地」ではなく、「もう一つの故郷」に変わりました。

応援隊としての活動は1年という短い期間でしたが、私にとってはかけがえのない時間でした。応援隊という名ばかりで、何もできなかったと悔いが残ることの方が多いですが、いまま「岩手」という県名を見聞きすると嬉しくなり、立ち止まったり、手に取ったり、想いを馳せています。

応援隊を卒業後は、地元愛媛で高校の教員をしています。岩手を離れたあとすぐに、地元の小中高生と東北沿岸へ訪れる機会をいただきました。これからも震災を風化させないことはもちろんですが、この記憶を若い世代へ伝えること、今後訪れるであろう災害に備えた防災学習に少しでも携わることで、応援隊での経験を生かしていきたいと思っています。未熟な私を応援隊として迎え入れてくれた山田町社協の皆様を始め、山田町の方々、そして応援隊に関わってくださった多くの方々へ感謝するとともに、これからも岩手県の発展を心から願っています。ありがとうございました。



有元 慶子(愛媛県在住※旧姓山下)

活動期間:2013年4月15日~2014年4月14日

配置先:山田町社会福祉協議会

いわて復興応援隊メッセージ

私がいわて復興応援隊を志望した動機は、山田町の人たちです。当時テレビに映る東北の映像は、同じ日本とは思えず、現実に行き詰っていることとも考えられぬ物ばかりでした。

東北の地で私にできることはないかと思うことが増え、ボランティアに参加し、山田町のまちや人たちに惹かれ、「ここに住みたい」と思うようになりました。そんな時にいわて復興応援隊の存在を知り、応募しました。



応援隊での活動の思い出は、岩手で過ごした日々のすべてです。共に仕事をした山田町社会福祉協議会の皆さま、遊んだ子どもたちみんな、山田のじいじ、ばあば、兄さん、姉さん。会えば体調を気にしてご飯をくださった人たち、バスケットを一緒にした人たち、家族のような保護者、いつもお弁当を買いに行ったあのお店のお母さん、髪を切ってくれる美容師さん、パン屋を構えた同級生、行きつけの居酒屋、ボランティアに来てくれたたくさんの人。美しい景色。美味しい味。全てがいつでも思い出せるくらい、鮮明で美しい大切な思い出です。

大学を卒業したばかりで世間知らずの若造を、ここまで育てていただいた山田町は、私のふるさとです。

近いうちに家族3人で私の大切な人たちに会いに、ふるさとへ行きたいと思います。

木村 公介(東京都在住)

活動期間:2013年4月15日～2016年4月14日

配置先:山田町社会福祉協議会

私は2013年4月から2016年9月までの約3年半、岩手県大船渡市にあるNPO法人夢ネット大船渡に所属し、仮設住宅に配布する復興情報誌の作成などを通して、復興支援活動に携わりました。応援隊となったきっかけは、前職が地方紙の新聞記者だったので、その時の経験を活かして復興支援に関わりたかったのと、少し被災地域に腰を据えて長期的に活動に携わりたかったからです。活動中は、取材やイベント開催、仮設住宅での英語教室運営など、様々な形で地域の皆さんと交流しました。地元の方々から岩手の方言を学び、心温まるひとときを過ごした事が忘れられない思い出となっています。

岩手県を離れてずいぶん時間が経ちましたが、岩手県が好きな気持ちはこれからも変わりません。復興関係のニュースを見るたびに被災地域へ思いを馳せながら、いつかまた必ず岩手へ行くという想いを胸に、私も頑張って日々の仕事や家事育児に邁進している所です。改めまして当時お世話になりました県の担当者、温かく受け入れて下さったNPO法人関係者、地元の皆様に心より感謝申し上げます。

河野 由佳(静岡県在住)

活動期間:2013年4月15日～2016年8月31日

配置先:NPO法人夢ネット大船渡

いわて復興応援隊メッセージ



私がいわて復興応援隊になったきっかけは、東日本大震災でした。テレビから流れる現実とは思えない光景に、居ても立っても居られない気持ちになり、その年の6月にボランティアとして岩手県を訪れました。その後、毎月ボランティア活動に参加していましたが、もっと腰を据えて活動をしたいと思い、いわて復興応援隊に応募しました。

下閉伊郡田野畑村で、震災の語り部やサッパ船アドベンチャーズなど体験型観光を行っているNPO法人体験村・たのはたネットワークで、各種プログラムの観光客へのアテンド業務を行いました。大手旅行会社のツアーや連続テレビ小説あまちゃんの影響もあり、連日多くの観光客の方に訪れていただきました。津波の語り部の方は、震災から10年以上経った今でも、震災や津波でこれ以上犠牲者が出て欲しくないという思いで辛い体験を語ってくれていることと思います。復興応援隊引退後は岩手を離れていますが、この願いは大切に受け継いでいきたいと思っています。

渡邊 悦子(千葉県在住)

活動期間:2013年4月15日~2018年4月14日

配置先:NPO法人体験村・たのはたネットワーク



応援隊となった動機は、東日本大震災が起こり、メーカーの営業職として、震災による工場不稼働の納期遅れの対応に追われ、いずれ落ち着き月日が経ち、いまだ震災で苦しんでいる方々が多い状況の中、いわて復興応援隊の取り組みを知った事を契機に、自分でも力になれる事があるのではと思い、応募しました。

活動の思い出はたくさんありますが、現在の添乗員の仕事に関わる契機となった地域住民の方々との日帰りバス旅行も一つの思い出です。新しい施設が出来ていく一方、活動の中で、住民さんの心の中に、仮設住宅にお住まいの方、家は残ったが支援が行き届かなかった方など、様々な震災による境遇のもと、心の壁があるのを感じました。そこで、分け隔てなく集える機会を作り、思い出を共有・積み重ねていく事で、未来志向の心持ちで、少しずつ壁を取り除ければと日帰りバス旅行を定期的に行い、久しぶりの再会や交流を深めている様子を見て少しは心の復興のお手伝いが出来たかなと感じました。

岩手もまだまだ復興途上かと思いますが、工作上、東北・岩手にお伺いする機会もあり、個人的にも伺いたいのので、復興に向けひたむきに生活、活動されている現状を自分なりに伝えていき、微力ながら応援し続けていけたらと思っています。

池田 陽一(鹿児島県在住)

活動期間:2013年4月15日~2018年4月14日

配置先:NPO法人陸前たがだ八起プロジェクト

いわて復興応援隊メッセージ

震災発生当時、私は大学生でした。ボランティア団体に所属し何度も災害救援活動を行うなかで、継続的に携わり復興の一助になりたいと思うようになり、運よく応援隊でご縁を頂きました。最初に配属された、大槌町で設立したばかりの第3セクター、復興まちづくり大槌株式会社ではプレハブ製の宿泊施設事業やふるさと納税の商品企画や管理運営などに4年間。その後5年目は大槌町役場商工観光課にて観光事業に携わらせていただきました。

今振り返ると、もっと上手くやれたな、成果を上げられたなという場面がいくつも思い浮かびます。一助になれたかは分かりませんが、得難い経験を積ませていただいた5年間でした。また、神奈川から来た社会人経験の無い私に良くしてくださった配属先、関係各所の皆さんへは感謝しかありません。

応援隊の活動通じて、大槌町は私にとって大切な繋がりのある第2の故郷になりました。これからも度々訪れたいと思います。

松岡雄也(神奈川県在住)

活動期間:2013年4月15日~2018年4月14日

配置先:復興まちづくり大槌株式会社、大槌町商工観光課



応援隊となった動機は、三陸ジオパークから日本ジオパークへの人的支援の要請です。そして私が岩手に向かったきっかけは、三陸ジオパーク会長宮古市長の「今回の災害がなくても、津波を伝えるのは、三陸の役目だ」との言葉に感動したからです。

知らない土地に行くことは、決して簡単なことではありません。復興支援のためには、まずは「とびこむ」ことが必要です。文化の垣根を超え、異文化の世界に「飛び込む」わけです。歓迎されるか、冷たく無視されるか、拒否されるかわかりません。

次に「近づく」です。その地域の人々の生活や文化を理解することが必要です。なるべく年中行事などに参加し、地域のリズムを体感するよう心がけました。三陸沿岸の地質地形や気候は多様です。また、三陸の大地や海がもたらす自然景観、風土、人々が育んできた歴史や文化などもまた多様でした。

さらに「相手の立場にたつ」ことが必要です。背景のない絵はなく、地によって裏打ちされない柄はないわけです。だから表面的な絵柄だけを見るのではなく、その根底にあるものも見る必要がありました。三陸地方は、津波のよる度重なる災害にもかかわらず人々の営みが続いています。この地では、大地と海と共にある「三陸の人々の生きざま」を強く感じる事ができたのです。そして、お互いを理解し認め合うことにより、同じ地平に立って、新たな価値の創造に努力することができました。

島原半島と三陸は、火山と地震津波という災害の種類は違います。しかし、どちらも地球の営みによる恵みと災いがあり、度重なる災害にもかかわらず、人々の生活が営まれてきました。

三陸は本当に素晴らしいところです。私にとって第2の故郷になりました。ありがとうございました。

杉本 伸一(長崎県在住)

活動期間:2014年5月1日~2020年4月30日

配置先:三陸ジオパーク推進協議会事務局

いわて復興応援隊メッセージ

応援隊となったきっかけは、純粹に、自身の声を遣い少しでも被災地の方々、又災害ラジオ局の方の力に少しでもなれることが出来たらとの思いでした。

私の仕事は、岩手県陸前高田市の兄弟都市の愛知県名古屋市にあるFMラジオ局のラジオパーソナリティでした。震災後は、居てもたってもいられず、ボランティアで30分間のラジオ番組を制作し、陸前高田災害エフエムにデータを送って、放送をして頂いていました。数ある災害エフエム局の中でも、何故陸前高田災害エフエムだったかというと、地震や津波で眠れない方の為に24時間、声や音楽を発信しているところに感銘を受けたからです。それからボランティアではなく、移住をして実際の現場で活動したい思いが強くなりました。現地では、被災して店を失ってしまい、再起しておられる方へのインタビューや地元の方の協力で地元の言葉を残すべく、方言で読む昔話を、仮設住宅で収録もさせて頂きました。

名古屋や大阪からもアプリで聴いているとのメッセージも届きました。忘れてほしくない思いがあったのでメッセージが他県から届くことは嬉しかったです。

10年経った今では、自身の活動は、地元の方に何のお役にも立てず申し訳なく思っています。ただ、応援隊としての活動のおかげで、現在暮らしている場所で陸前高田の方を繋いで、震災への備えをラジオを通し発信してもらう機会もありました。出会った方々や陸前高田のことはこれかも忘れることはないと思います。

柿元 恵美(東京都在住)

活動期間:2014年5月1日~2015年4月30日

配置先:NPO 法人陸前高田市支援連絡協議会 Aid TAKATA



わたしの応援隊=三陸ジオパークでの活動は、2015年からの約2年半あまりの期間でしたが、それまでの経歴を生かして、様々なことに取り組みせてもらいました。特に、三陸地域の津波防災や復興について研究していた経験をもとにしながら、当時の復興状況の他地域への発信、同じく災害で被災した地域からの視察受け入れ、そして子供たちへの継承のための復興・防災学習の企画に携われたことは、自分のなかでも印象深く残っています。

また、ジオパーク活動の目玉である地質や地域資源の活用と観光振興のコラボレーションについては駅を起点に徒歩でジオサイトや観光スポットを巡る周遊ルートの造成にも取り組みました。このノウハウを学校遠足の企画に生かす機会にも恵まれ、学校関係者、地域の協力者と協働しながら、生徒たちが地域の“見どころ”や“史跡”を訪ねながら“ジオパーク”や“震災”の要素に触れられるルートを提供することもできました。このような取り組みに携わることができ、三陸の地で復興のお手伝いできたことは自分にとって貴重な経験だったと感じています。

熊谷 誠(山形市在住)

活動期間:2015年4月1日~2017年10月31日

配置先:三陸ジオパーク推進協議会事務局

いわて復興応援隊メッセージ



長崎県の島原半島世界ジオパークでガイドをしていた私がこの応援隊となったきっかけは、ジオパーク活動に興味を持ち、自らの経験と知識で何かのお役に立ちたいという思いからでした。

三陸ジオパークの推進活動を通して5年間ほど宮古市内にある推進協議会事務局を中心に取り組ませていただきました。思い出として景色の美しさや食べ物のおいしさがあげられます。なぜこんなに景色が美しく食べ物が美味しいのだろう？という疑問は、地質的な遺産を活用するジオパークを通して学ぶ中で知ることが出来ました。

豊かな海と大地の恵は、遡ること5億年ほど昔の地球の営みで生まれた大地が元となっている、という事からなんとなく分かる気がしました。そこに住む人々は、豊かな恵みを受けて生活しているということを発見することができ、その地域に住みながら応援隊として活動できましたことを、本当に感謝しています。時には、自然現象による災害による悲しい出来事もございますが、豊かな海と大地の恵みを持つ三陸沿岸の地域は、本当に素晴らしい場所であると思います。皆さま方が幸せで過ごされる事を祈っております。

林 ちはる(宮古市在住)

活動期間:2016年2月1日~2021年3月31日

配置先:三陸ジオパーク推進協議会事務局



大学時代に地球科学科に所属し、活断層周辺域の活動について学んでいた私でも、未曾有の大震災と大津波は想像することも出来ず、まだ余震の続く中、ネット配信される映像ニュースを自宅で見いていたことを思い出す。

2011年8月に休暇を取って、思い入れの強い三陸鉄道の現状を見に行った。衝撃を受けた。それから年に何度も三陸に足を運んだ。直接肌で感じることの大切さが、応援隊に応募する原点となっている。

2017年、応援隊の業務は『三陸復興博(仮)』開催のための調査。ハード面の復興作業が進む中で、現地に住む人たちの心の復興を支える活動だった。先輩応援隊員をはじめ、多くの人々の話を伺いながら作業に邁進した。2018年に入ってから宮古の三陸ジオパーク推進協議会に異動し、ジオパークを通

じた情報発信とプロジェクト実施のサポートを行った。

活動期間は短期間だったが、沿岸をくまなく移動し、それぞれの課題・解決法があることを知った。もちろん復興はまだ終わらない。活動を終えても私なりに沿岸に出向き、課題解決のための一助となれたらと思う。

阿久津 貴之(福岡県在住)

活動期間:2017年5月15日~2018年12月31日

配置先:三陸総合復興準備室

三陸防災復興プロジェクト2019推進室

三陸ジオパーク推進協議会事務局

いわて復興応援隊メッセージ

定住・交流推進員として5年間活動しました。

学生時代に、過疎地の農地活用を目的とした短期滞在型二拠点居住について学びました。当初のターゲット「リタイヤ層」から「若年層」へ移行し、「ふるさと回帰」の新しいステージに関わることができると思ったことが動機です。活動は主に、移住支援に関する情報を、SNSを活用して広報することでした。単独で事業を企画して行動することはできませんでしたが、県職員や協議会職員と一緒に沿岸地域や県内各地へ取材や企業訪問、首都圏でのセミナーの開催、イベントでのブース対応など初めてのことばかりでしたが、充実していました。初めてのイベント対応で司会進行を仰せつかったときはさすがに参りました。

県外からの移住者でもある「地域おこし協力隊」の支援団体の発足が、一番嬉しい出来事でした。最後に、震災でふるさとから離れなければならなかった方々が、「ふるさと回帰」できるよう、これからもご尽力いただきたいと思います。

高橋 美紀(盛岡市在住)

活動期間:2018年10月1日~2023年3月31日

配置先:いわて定住・交流促進連絡協議会

定住・交流推進部

